

な聲が耳もこで、「兄さん寒からう。」と問うた。さうする
と、又別のやさしい聲がいたはるやうに、「お前寒からう。」
と答へた。

彼は起きて行燈にあかりをつけて、部屋を見廻した。誰
も居なかつた。障子は皆しまつて居た。戸棚をしらべた、
空であつた。不思議に思ひながら、あかりをつけて置いて、
又ねた。そして直ちに、聲が枕もこで訴へるやうに又話し
た。

「兄さん寒からう。」

「お前寒からう。」

其時初めて彼は夜の寒さでない寒さでゾツとして來た。
何度も何度も聞いた。そして其度毎に益々恐ろしくなつ
て來た。聲はふさんの中にあることが分つたからであつ

た。そんな風に叫んだのはかけふさんであつた。

彼は急いで自分の僅かのを集めて、ハシゴ段を下つ
て主人を起して、あつたことを話した。するに主人は大層
怒つて答へた、「お客様は御意に召すやうに、萬事やつてあ
ります、全く、ごころでお客様は余りお酒を召し上つたもの
ですから、悪い夢を御覽になつたのです。」それでも、お客は
直ちに拂ふ可き分を拂つて外に宿をさがすことを主張し
た。

翌晩外の客が來て夜の宿をもこめた。おそくなつて主
人は同じ話でお客に起された。そして不思議にも此お客
は、少しも酒を飲んで居なかつた。自分の商賣を妬んで、お
こし入れやうとする悪計だらう。と思つたので、主人は激
して答へた。「お氣に召すやうに凡ての事がしてあります。